

十月に入り、季節は秋を迎えます。私たちは、季節の変わり目を、様々な出来事から受け取ることができます。食卓にならぶ食材や水田の風景、街を行き交う人々の服装など、季節が変わることを伝えるものは、いろいろあります。

空に浮かぶ雲は季節の変化を告げるものの一つです。秋の雲の代表格は、いわし雲、うろこ雲、さば雲と呼ばれる雲ですが、これらは、同じ種類の雲でありながらも、見る人によって違う名前と呼ばれます。

名前が異なれば、それぞれの雲もきっと人それぞれに違った魚に見えてきます。

ある人にとっては、青い空の海を悠々と泳ぐ姿に見え、今の自分との対比でうらやましく思われることもあるでしょうし、また、別の人にとっては、旬を迎える「さば」の季節の到来に、うきうきとされることもあるでしょう。

このように、私たちは、自分自身を通して、自分の見たいものとして雲の姿を見ています。秋の雲は、澄み渡る、深い空を背景に持ち、より一層、生き生きとして見えてきます。

ところで、道元禅師は、この秋をどのように見つめていらっしやっただのでしょうか？
道元禅師の遺された、私たちになじみの深い和歌に、

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すずしかりけり

とあります。道元禅師は、月の月らしさとしてのありようを、秋の月に見いだされていらっしやいます。

ここでは、月が何に見えるかではなく、月を月としてご覧になっていることがとても印象深いところです。私たちは、目や手、足、鼻など、感覚器官を通して物事を見ているのですが、そこには、様々な思い入れが入り込み、自分の見たいものとして物事を見ていることもあります。

お腹が空いていれば、月は食べ物にも見えてくるでしょうし、友達とけんかをしていたら、友達の顔にも見えてくることでしょう。

道元禅師の見方において興味深いところは、そのように、自分の感情が入ってくることに冷静に気付き、月そのものの姿をありのままに見て、その美しさに気づかれ、和歌にされているところです。

月を月として見るために、秋の空の深さは、私たちの手の届くところに月を近づけてくれます。この秋の訪れ、空の深さや、雲の豊かさ、そしてありのままの月の美しさをじっくりと眺められてはいかがでしょうか。